

戦間期バイエルンにおけるシュールラントハイムの 転換過程

江頭, 智宏
福岡大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7364839>

出版情報 : 国際教育文化研究. 4, pp.59-70, 2004-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



戦間期バイエルンにおけるシュールラントハイムの転換過程

江頭智宏

1. はじめに

ドイツにおけるシュールラントハイム (Schullandheim, 学校田園寮) とは、田園地域に設けられた教育・学習施設であり、特に都会にある学校が、一定の期間、学級単位や学年単位で利用するものである。田園地域における美しい風景や豊かな自然といった教育環境を利用することによって、都会での教育活動を補完することを目指したのであり、今日においても、学校内での通常の教育活動を補うものとして、シュールラントハイムでの滞在は積極的に推奨されている。またシュールラントハイムは新しく建てられたものだけではなく、古城などの現存する建造物の一部を利用して作られたものも相当数あった。シュールラントハイムにおける具体的な教育内容・活動内容として、教科学習を始めとして、体操、スポーツ、水浴、散策、遠足、音楽、演劇、読書、菜園活動、集団討論といったものを挙げることができ、このようなカリキュラムに従いながら、児童や生徒は、教師たちとともに自然の中での共同生活を経験したのである。シュールラントハイム運動は、主として第一次世界大戦後にドイツ国内の各地で個別に始められるが、1926年にドイツ・シュールラントハイム全国連盟 (Reichsbund der deutschen Schullandheime, 以下「全国連盟」と略述) が結成されたことを受けて全国レベルでの制度的基盤も作られ、ヴァイマル時代に一部の学校や地域で積極的に実践されていた新教育運動の一翼を担うことになった。新教育運動の多くは私立学校で実施されていたことを考えると、シュールラントハイム運動は、公立学校における代表的な新教育運動であったとすることができる。

筆者は別稿において、全国レベルにおける戦間期のシュールラントハイム運動を取り上げ、ヴァイマル時代に確立したシュールラントハイム運動がナチ時代においても廃止されることなく積極的に「支持」され、全国連盟がナチス教員同盟 (Nationalsozialistischer Lehrerbund) とライヒ青少年指導部 (Reichsjugendführung) へと編入させられる過程について論じた⁽¹⁾。このような全国レベルの動向を取り上げた前稿に対して、本稿はバイエルンという一地域の事例を取り上げるものであるが、バイエルンを取り上げる理由は、バイエルンが全国の動向と比較して独自の展開をもつものであるからである。すなわちバイエルンは、ヴァイマル時代にはシュールラントハイム運動が最も停滞していた州であったが、ナチ時代においては重点的にシュ

ールラントハイムの政策が展開されるようになり、ヴァイマル時代からナチ時代にかけてのシュールラントハイムの転換を最も明確に体现しうる地域であるからである。また前稿が、特にシュールラントハイム運動の制度面に焦点を当てたのに対して、本稿はとりわけシュールラントハイム運動の教育目的の側面に焦点を当てるものとする。なおヴァイマル時代の「シュールラントハイム」が、飽くまでも児童・生徒の両親を実施の主体者とする教育活動であったのに対して、ナチ時代の「シュールラントハイム」は、ナチス教員同盟を中心として組織的・制度的に実施されたものであるという側面が強いため、以下においては、ヴァイマル時代を含めて一般的なシュールラントハイムの動向を念頭に置く場合は「シュールラントハイム運動」と、特にナチ時代のシュールラントハイムの動向を念頭に置く場合は「シュールラントハイム政策」と区別して記述する。

研究論文ではないが、管見の限り戦間期におけるバイエルンのシュールラントハイム運動を取り上げたものとして、『バイエルン教育制度史ハンドブック』に所収された、ペーテックによるバイエルンのシュールラントハイム運動の通史を挙げることができる⁽²⁾。その中でペーテックは、シュールラントハイム運動はナチズムの犠牲者であるという見方を大前提として示しつつも、その一方でナチズムの犠牲者としてのみシュールラントハイム運動を見れば矛盾が生じてくるものであり、また少なくともそのような見解はシュールラントハイム運動をよく見せることにつながると述べている。このようにペーテックは、ナチ時代を射程に入れることを通じてシュールラントハイム運動を批判的にとらえる見方を示しており、ナチ時代のシュールラントハイム政策は、単にスローガンの面（例えば「民族共同体への教育」の提唱など）だけではなく、実施形態の面においてもヴァイマル時代のシュールラントハイム運動を継承していると指摘している。本稿ではこうした見解に対して、ヴァイマル時代からナチ時代にかけてバイエルンのシュールラントハイム運動は大きく転換されたという面に焦点を当てる。またペーテックが用いていない未公刊史料を駆使しながら論を進めていくものとする。

本稿で使用する史料は、主として、バイエルン中央州立文書館（Bayerisches Hauptstaatsarchiv）のMK 42607のファイルに収められている史料であるが、他にもミュンヘン市立文書館（Archiv der Landeshauptstadt München）のシュールラントハイム運動関連の史料を参照した。

以上のような研究状況および史料状況を踏まえて、本稿では、バイエルンで本格的にシュールラントハイム運動が着手されたヴァイマル時代末期から、シュールラントハイム政策が停滞することになった第二次世界大戦の勃発までの時期を対象として、バイエルン文部省とシュールラントハイムの推進団体との書簡のやり取りを通じて、戦間期におけるシュールラントハイムの展開について取り上げるものである。

2. ヴァイマル時代バイエルンにおけるシュールラントハイム運動

バイエルンにおいては、1924年に、アウクスブルクのマリア・テレジア女子ギムナジウム（Maria-Theresia-Mädchengymnasium）の教師たちによって、確認されうる最初のシュールラントハイムが開設された⁽³⁾。ただこのシュールラントハイムは、本格的なものであるとは言えなかった。また1926年10月に、ルドルフ・ニコライ（Rudolf Nicolai, 1885 - 1970）を理事長と

して全国連盟が創設されたことを契機として拡大していく他州のシュールラントハイム運動と比較して、バイエルンのシュールラントハイム運動は概して低調であったと言える。たとえば1927年度の時点で、総計167棟に及ぶシュールラントハイムが全国連盟の傘下に登録されていたが、最も多いハンブルクの37棟に対して、バイエルンはドイツで最大の面積をもつ州でありながらも、わずか1棟にとどまった(4)。ヴァイマル時代の新教育運動は、ベルリン、ハンブルク、ブレーメン、チューリングゲンといった北部や東部のドイツ諸州においてとりわけ盛んであったが、こうした状況は、シュールラントハイム運動にも同様に該当するものであったと言える。

全国連盟に所属し、バイエルンにおいて中心となってシュールラントハイム運動に携わっていたニュルンベルクの小学校教師アドルフ・ザルフナー (Adolf Salffner) は、バイエルンにおいてシュールラントハイム運動が停滞していた理由について、以下のように述べている。

「シュールラントハイム運動が遅れているのにはいくつかの理由がある。そのうちのひとつは、シュールラントハイムの設立が前提とするような家庭と学校との間の内的で密接な関係が存在していないことである。そしてシュールラントハイム運動がバイエルンで最初に始められたニュルンベルクでは、宗派による学校の分裂と、それとともにプロテスタント、カトリック、宗派混合へと分かれた父母たちの団体の存在がさらなる障壁であった。」(5)

ヴァイマル時代のシュールラントハイム運動は、原則として学校側が運営主体となって実施するのではなく、飽くまでも父母たちによる自主的な運動としての性格をもつものであったため児童・生徒の父母たちの協力にかかっている側面が強く、学校と家庭との密接な関係が欠如していることや、宗派ごとに父母たちの団体が分裂していることは、シュールラントハイム運動の実施において致命的なものになると、ザルフナーは考えていたのである。

こうした中で1929年に、ザルフナーの尽力によって、バイエルンで初めての本格的なシュールラントハイムが、ヴァイセンブルク (Weißenburg) 近郊にある城塞であるヴェルツブルク (Würzburg) の中に設けられた。ザルフナーは、全国連盟が編纂した『イラスト入りハンドブック』 (Illustriertes Handbuch) の中で、以下のようにヴェルツブルクのシュールラントハイムの外観を述べている。

「ヴェルツブルクは16世紀の山岳要塞である。(中略) 巨大な壁、大きな稜堡、深い濠、全体的な建物のまとまりは、印象の与える巨大な力と、明白な絵のような美しさによって、まさしく洗練されたものである。」(6)

同様にシュールラントハイムの内観に関しては、以下のように記されている。

「ハイムの格別の長所は、部屋全体の大きさと広さとにある。3つの寝室は合わせておよそ380㎡であり、3つの休憩室は合わせておよそ290㎡であり、廊下はおよそ145㎡である。それに加えて台所や浴室などを含めることができるので、ハイムの中の広さは大体1,000㎡にまで達する。窓の数を増やしたので、太陽や光や空気がいっぱい入り込んで来ることができ、部屋の様々な色調は好意的な印象を強くし、ハイムの設備は質素で住みやすいものである。」(7)

そもそも『イラスト入りハンドブック』は、ドイツ全土へのシュールラントハイム運動の広報を目的として編纂されたという性格をもつものであるため多少割り引いて考えなければならぬであろうが、まさに都会の子どもたちにとって新鮮な影響を与えるであろう、シュールラントハイムの壮大な外観の様子と快適な内装とが窺えるのである。

このようにヴュルツブルクにシュールラントハイムが新設されることに対して、1929 年 4 月 3 日に全国連盟の理事長ニコライは、以下のような書簡を送っている。

「教師アドルフ・ザルフナー氏を通じた、ニュルンベルクの宗派共同の父母組合による（シュールラントハイムの設立に関する一引用者）請願書のコピーを承りまして、ドイツ・シュールラントハイム全国連盟の名において、請願書を温かく支持します。

（中略）もしもバイエルンでもシュールラントハイム運動を支援するのであれば、熱烈に歓迎します。」⁽⁸⁾

このように、シュールラントハイム運動が最も遅滞していたバイエルンにおいて初めて本格的なシュールラントハイムの設立が実現したことを、全国連盟も歓迎しているのである。ただその後の 1929 年 4 月 29 日にバイエルン文部省は、ヴュルツブルクを管轄するミッテルフランケンの政府に宛てて以下のような書簡を送っている。

「ヴァイセンブルクのヴュルツブルクへのシュールラントハイムの設立に対して、ハイムでの滞在の間は個々の学級ができるだけ担任の教師の指導のもとにおかれ、また授業の目的のためにハイムでの滞在が用いられるのであれば意義はありません。また生徒や両親に対して、シュールラントハイムでの滞在への参加は決して強制されるべきではありません。」⁽⁹⁾

このようにバイエルン文部省は、飽くまでもシュールラントハイム運動に対して慎重であり、シュールラントハイム運動が授業の枠組みの中で実施されることと、強制参加がなされるべきではないことをその条件としているのである。

そして 1932 年には、バイエルン教員組合（Bayerischer Lehrerverein）の内部に、ザルフナーとハンス・ザックス（Hans Sax）を中心として、バイエルン・シュールラントハイム活動共同体（Bayerische Arbeitsgemeinschaft für Schullandheime）がニュルンベルクで結成されることになる⁽¹⁰⁾。バイエルン・シュールラントハイム活動共同体はナチス教員同盟に編入されるまでナチ時代においてもシュールラントハイムを支援していくことになる。

以上のように、ヴァイマル時代のバイエルンは、シュールラントハイム運動が根付くのが最も遅かった地域であったが、1929 年のヴァイセンブルクのシュールラントハイムの開設を通じて漸くシュールラントハイム運動が本格的に始められた。ただこのようなシュールラントハイム運動に対して、バイエルン文部省は一定の距離を置いていたと言える。次節ではこのようなシュールラントハイム運動がナチ時代に受けた転換について論じる。

3. ナチ時代におけるバイエルンのシュールラントハイム政策

（1）シュールラントハイム政策の拡大と奨励

前節で述べてきたように、バイエルンは他州と比較してシュールラントハイム運動が低調で

あったが、ナチ時代においては積極的にシュールラントハイム政策が進められていくことになる。その皮切りとして、1933 年 1 月のヒトラー内閣成立直後に、バイエルン・オストマルク（Bayerische Ostmark）のマイブルン（Maibrunn）に、シュールラントハイムの建設が着手された。また、1933 年 10 月 7～9 日にハノーファー（Hannover）で開催された第 5 回のドイツ・シュールラントハイム全国会議において全国連盟がナチス教員同盟へと編入されることが決定されたのを受けて、ナチス教員同盟のライヒ専門領域（Reichssachgebiet）のひとつとしてシュールラントハイムが設けられ、ナチ時代には主として全国連盟を取り込んだナチス教員同盟がシュールラントハイム政策を実施することになる。ライヒ専門領域シュールラントハイムの長であるライヒ専門担当官（Reichssachbearbeiter）には、全国連盟初代理事長のニコライが就任したように、ニュルンベルクの小学校教師ザルフナーも含めて全国連盟のメンバーの多くはそのままナチス教員同盟へと加盟した。

全国連盟を編入させたナチス教員同盟は、バイエルン文部省に対して、積極的にシュールラントハイムの運営の支援を要請していくことになる。例えば、1934 年 4 月 20 日にバイエルン文部省に宛てた書簡においてザルフナーは以下のように述べている。

「署名者（ザルフナー引用者）は、（諸氏との引用者）懇談を通じて、シュールラントハイムは地域健康保険組合（Ortskrankenkasse）の側から支援されるべきであることを許可するよう経済省に要求しました。しかし私はこの申請をまずは文部省に提出することを求められました。なぜならばこの申請には文部省の承認を必要としないからではないからです。私たちは私たちの経済省への申請を文部省に示し、シュールラントハイム運動の好ましい評価をもって経済省に取り次いでもらえることをお願いします。」⁽¹¹⁾

ザルフナーは、ヴァイマル時代には経済的な裏付けが確立していなかったシュールラントハイムを、地域健康保険組合という社会保険の資金によって援助するべきことを主張しているのであり、シュールラントハイムは文部省の管轄下にあるものであるから、地域健康保険組合を管轄する経済省にとっても文部省の承認を必要としたのである。またこのような主張は、「社会保険を利用することを通じてシュールラントハイムの運営費と維持費のための資金準備をする」ことを謳った、1933 年 7 月 27 日にナチス教員同盟の初代指導者ハンス・シェム（Hans Schemm, 1891 - 1935）とニコライおよびザルフナーとの間で締結された声明である「ドイツの教育制度へのシュールラントハイム運動の組み込み」（Einbau der Schullandheimbewegung in das deutsche Erziehungswesen）によっても裏付けられる⁽¹²⁾。

約半月後の 1934 年 5 月 4 日にも、ナチス教員同盟はバイエルン文部省にシュールラントハイム政策を推奨するための書簡が送られている。この書簡においては、地域健康保険組合（Ortskrankenkasse）と並んで健康保険組合（Krankenkasse）からの援助を受けられるように述べられており、経済省と、健康保険組合を管轄する内務省に取り次いでもらえるよう文部省に仲介を求めている⁽¹³⁾。また、シュールラントハイム政策とは、子どもたちの健康を促進するためのものであるというのが援助を受けられるべき理由であるとされている。このことに関連して、第 8 学年の少年たちを対象としたマイブルンのシュールラントハイムにおける滞在の効

果に関する学校医の調査結果も報告されている。この調査は少年たちの栄養状態と血液を調べたものであり、ハイムへの滞在前と比較して滞在後はともに健康なグループに属する少年たちが増加したというものである⁽¹⁴⁾。このような健康上の効用を示すことによって、シュールラントハイム政策の積極的な意義を説明することが試みられたのである。

以上のように、ヒトラー政権の成立後に全国連盟を取り込んだナチス教員同盟は、シュールラントハイム政策を財政的に支援することの協力を積極的にバイエルン文部省に要請していた。その際に主張のポイントとなったのは、シュールラントハイムへの滞在による子どもたちの健康増進であった。

(2) シュールラントハイム政策の目的

次に、バイエルンの中でも東部地方に当たる、オーバーフランケン (Oberfranken)、ニーダーバイエルン (Niederbayern)、オーバープファルツ (Oberpfalz) が合併して設置されたバイエルン・オストマルク管区を中心として、シュールラントハイム政策の展開について、その設立目的を中心として検討したい。ちなみにシエムが、ヒトラー内閣が成立する直前の 1933 年 1 月 19 日にバイエルン・オストマルクの管区長に就任した⁽¹⁵⁾。

先述した、ヒトラー内閣の成立直後に建設されたマイブルンのシュールラントハイムは、最終的に 1933 年 7 月に開設されることになるが、開設を前にしてバイエルン・シュールラントハイム活動共同体は、1933 年 6 月 21 日にバイエルン文部省に以下のような書簡を送っている。

「シュールラントハイム運動は、1928 年にバイエルンでも確かな地歩を占めました。

ヴァイセンブルクのヴェルツブルクと、シュヴァンドルフ (Schwandorf) のシャルロッテンホフ (Charlottenhof) に建設され、最近のオストマルク-シュトラウビング

(Straubing) のマイブルン-におけるハイムの設立への準備も進み、この夏にはハイムが開設され予約も入るであろうという状態にまで進捗しました。私たちは、バイエルン・オストマルクという国境地帯に設置されたシュールラントハイムの経済的・文化政治的意義を敢えて指摘したいのです。」⁽¹⁶⁾

ここで指摘されるべきことは、国境地帯としてのバイエルン・オストマルクの経済的・政治的な意義が重視されていることである。それがゆえにバイエルン・オストマルクは、ナチ時代におけるシュールラントハイム政策の焦点とされるのである。

このように、田園地帯の中でもとりわけ国境地帯にシュールラントハイムを設立するという政策は、1933 年 10 月 4 日にライヒ文部省とプロイセン文部省が制定し、ナチ時代におけるシュールラントハイム政策の根本的な指針ともなった、「シュールラントハイムの奨励に向けたライヒおよびプロイセン文部省の省令」(Grundlegende Verfügung des Reichs- und Preußischen Miniusteriums für Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung zur Förderung der Schullandheime.) によっても裏付けられることになった。この省令はシュールラントハイムに関する 4 つの基本方針を掲げているが、シュールラントハイムにおける国境地帯の重要性は、とりわけその第 1 方針に以下のように示されている。

「シュールラントハイムは、健康や学習を目的として実施されるのではなく、むしろ

第一に、民族的・政治的目的のために実施される。とりわけ国境地域におけるシュールラントハイムの設立と拡張、国境地域におけるドイツ的意識をもった児童・生徒たちとの交流、ならびにドイツ民族を意識した政治的な共同体教育の強調といったことがそこから最も強く要請されるべきである。」⁽¹⁷⁾

別稿でも述べたように、民族意識の涵養というシュールラントハイム運動の目的は確かにヴァイマル時代にも地域によっては掲げられていたものであったが⁽¹⁸⁾、ナチ時代においては、健康の増進や学校教育の深化といった他の教育目的を押しつけて、民族意識の涵養という目的が強く押し出されることになるのである。ここにおいて、ヴァイマル時代からナチ時代にかけての教育目的上の転換を見て取ることができ、この転換はバイエルンのシュールラントハイム政策にも大きな影響を及ぼすことになったのである。また、シュールラントハイムが設立される田園地域とは、都会の学校では体験することのできないような教育活動を提供する場所であるがゆえに重要なのではなく、まず第一にドイツの国境地帯であるがゆえに重要なのであるという認識が明確に提起されていることも指摘できる。ちなみに、第2指針ではシュールラントハイムが十分に利用されるべきこと、第3指針では野外スポーツを重視すべきこと、第4指針ではナチズムの世界観に基づいた授業を実施すべきことが謳われている⁽¹⁹⁾。

先のマイブルンのシュールラントハイムに続いて、1934年11月8日にバイエルン・オストマルク管区の国境局は、バイエルン・オストマルクにおける第2のシュールラントハイムの設立に関して、バイエルン文部省のシュールラントハイム課に書簡を送っている。それによれば、マイブルンに創設された最初のバイエルン・オストマルクのシュールラントハイムは、1年間で宿泊児童・生徒が延べ4,000人を越えて成功したと評価されており、その成功に続いてバイエルン・オストマルクのシュールラントハイム作業共同体は、アンベルク（Amberg）のカストゥル（Kastl）の古城に第2のバイエルン・オストマルクのシュールラントハイムを設立することを、財務省の支援のもとで計画しているのである⁽²⁰⁾。国境局は、シュールラントハイム作業共同体の活動を支持する形で、シュールラントハイムの目標と意義に関して以下のように主張している。

「国境をめぐる政治的な理由から、民族性の強化を涵養することを目的とするシュールラントハイムをバイエルン・オストマルクの地に設立させる計画を支持することを、我々はバイエルン文部省に懇願します。シュールラントハイムの目標は、子どもを民族共同体の一員とさせることと、故郷に根差した連帯意識を徹底して子どもに植え付けることです。」⁽²¹⁾

このよう国に境地帯のバイエルン・オストマルクに、マイブルンに引き続いてシュールラントハイムを設立することを通じて、児童・生徒に民族性を涵養するというシュールラントハイムの政策目的が明確に窺えるのである。

また1935年2月12日に、ナチス教員同盟のライヒ専門担当官ニコライは、バイエルン文部省に宛てた書簡の中で、バイエルンでもシュールラントハイムが導入されるようになったことを賞賛しており、そのことを受けて以下のように述べている。

「我々（ナチス教員連盟シュールラントハイム専門領域－引用者）は、1933年以前

にはほとんど導入されていなかったバイエルンにおいて、今やシュールラントハイムの活動が力強く開始されていることを認めており、そうした状況について満足しています。(中略) バイエルンの教員たちが、もちうる限りの行動力をもって、シュールラントハイム政策にこれまで精進してきたことを私は確信しています。とりわけ国境地帯であるバイエルンは、国境における文化政策を実施するというさらに特別な義務を負っているのです。」(22)

ここでも国境地帯に焦点を当てたシュールラントハイム政策の特徴が同様に窺え、バイエルンにおいては、ヴァイマル時代からナチ時代にかけてシュールラントハイムの大きな転換があったことをニコライは認めているのである。ニコライ自身、ヴァイマル時代には、決してシュールラントハイム運動を通じた民族精神の涵養という目的を重視してはいなかったのであるが(23)、ナチ時代においては明らかに論調が変わっていると言える。

こうした流れの中で、バイエルン・オストマルクを中心都市のひとつであるレーゲンスブルク(Regensburg)を所在地とする、レーゲンスブルク・シュールラントハイム連盟(Schullandheimverein Regensburg)が、バイエルン・シュールラントハイム活動共同体の中心人物でもあったザックスらによって結成された。1938年11月10日には連盟規約も締結され、シュールラントハイム政策に関連する公益的・慈善的な目標に奉仕することが連盟の主要任務であるとされた(24)。レーゲンスブルク・シュールラントハイム連盟は、1939年4月29日にバイエルン文部省に宛てた書簡において、バイエルンとチェコとの境界線にあるベーメン森(Böhmerwald)にシュールラントハイムを新しく設立することを計画していることを示し、そのための財政援助をバイエルン文部省に求めている。その際に連盟は、シュールラントハイムの設立に関しては財政的支援をするが運営に関しては財政的支援をしないという消極的な態度を示している文部省を説得するために、ベーメン森という土地にシュールラントハイムを設立することの利点および必要性として6点のことを主張している。1～4点目では、1,000メートルを超える山々があるベーメン森は、健康増進の効果が有り、身体鍛錬にとって都合のいい場所であるという理由を掲げ(25)、5点目と6点目では、前掲の1933年10月4日の「シュールラントハイムの奨励に向けたライヒおよびプロイセン文部省の省令」(「シュールラントハイムの省令」)に基づいて以下のように述べている。

「5) シュールラントハイムの省令によれば、シュールラントハイムは第一に民族的・政治的目標に奉仕するものです。ドイツとチェコスロヴァキアの民族境界線の側にあるベーメン森に設立されるハイムは、『国境のハイム』(Grenzlandheim)としてみなされるでしょう。」(26)

「6) シュールラントハイムの省令によれば、ベーメン森のハイムはバイエルン・オストマルクとズデーテンとオーストリアからの生徒たちに大いに民族ドイツ的な意味における政治的共同体教育への機会を与えるでしょう。同時にそのことを通じて、この管区領域におけるシュールラントハイム政策は力強い刺激を獲得するでしょう。」(27)

このようにレーゲンスブルク・シュールラントハイム連盟は、国境地帯であるベーメン森のシュールラントハイムを利用することを通じて、児童・生徒に民族意識を涵養させる効果が期待

できるという意義を主張しているのである。

以上、バイエルン文部省に送られてきた書簡を素材として、バイエルン・オストマルクを中心としたナチ時代のシュールラントハイム政策の目的を検討してきたが、バイエルン・オストマルクは東部ヨーロッパとの国境地帯であるため、シュールラントハイムでの滞在を通じて児童・生徒に民族意識を涵養させることが求められたのである。一方で、その多くが豊かな自然に触れられるために田園地域に建てられたという、ヴァイマル時代のシュールラントハイム運動の意義が次第に薄れていったのであると言える。

4. おわりに

以上のように、ヒトラー内閣の成立以降のバイエルンにおいては、ヴァイマル時代にはドイツ諸州の中でも最も低調であったシュールラントハイムが積極的にバイエルン文部省に要請され、その多くが実行に移された。この点においても、バイエルンにおいてはヴァイマル時代とナチ時代との間にはシュールラントハイムをめぐる大きな転換があったと言える。そしてナチ時代のバイエルンにおいてシュールラントハイム政策が要請されたのは、とりわけバイエルンの東部地域であるバイエルン・オストマルクが広大な国境線を有しており、シュールラントハイムでの教育活動が児童・生徒の民族意識の涵養にとって有効であると考えられたからである。ただし一方で、バイエルン文部省自体はシュールラントハイム政策に決して積極的ではなかったという点も指摘されうる。

このようなシュールラントハイムの歴史を念頭に置いた場合、ドイツ新教育の新たな歴史記述を必要とすると考えられる。すなわちシュールラントハイムは、ヒトラー内閣の成立をもって制度的に廃止されることはなかった（バイエルンではむしろ逆に積極的に導入された）が、教育目的が大きく変えられて存続したものであり、ヒトラー内閣の成立をもって終焉したというドイツ新教育の記述⁽²⁸⁾、ナチズムとの親縁性を強調するドイツ新教育の記述⁽²⁹⁾、そしてヒトラー内閣の成立後も「亡命教育」としてその遺産が継続したというドイツ新教育の記述⁽³⁰⁾などでは描き得ない事例であるからである。

最後に、ヴァイマル時代にシュールラントハイム運動に携わっていた人物の多くがナチ時代においてもシュールラントハイム政策を担っていることの問題が残ることになるが、この点については他日の課題と期したい。

注

- (1) 拙稿「1930年代ドイツにおけるシュールラントハイム」『日本の教育史学』（教育史学会）第46集、2003年、241-259頁。
- (2) Petek, Edwin: Schullandheimbewegung, in: Liedtke, Max (Hg.): *Handbuch der Geschichte des Bayerischen Bildungswesens*, Bd. 4, Bad Heilbrunn/OBB 1997, S.109-124.
- (3) *ibid.*, S.113f.
- (4) Kruse, Klaus: Zur Geschichte der Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik, in: Verband Deutscher Schullandheime e.V. (Hg.): *Pädagogik im Schullandheim. Handbuch*,

Regensburg 1975, S.43.

(5) Breckling, Theodor (Hg.): *Illustriertes Handbuch*, Kiel 1930, S.213.

(6) *ibid.*, S.215.

(7) *ibid.*

(8) Reichsbund der deutschen Schullandheime e.V. an das Kultusminister, den 3. April 1929, in:
Bayerisches Hauptstaatsarchiv (künftig: BayHStA) MK42607: Schullandheim.

(9) Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und Kultus an die Regierung, Kammer der Innern von
Mittelfranken, den 29. April 1929, in: BayHStA MK42607.

(10) Petek, Edwin: Schullandheimbewegung, S.115.

(11) Reichsbund der deutschen Schullandheime, Reichsfachschaft im NSLB an das Bayerisches Staats-
ministerium für Unterricht und Kultus, den 20. April 1934, in: BayHStA MK42607.

(12) Einbau der Schullandheimbewegung in das deutsche Erziehungswesen, den 27. Juli 1933, in:
BayHStA MK42607.

(13) Reichsbund der deutschen Schullandheime, Reichsfachschaft im NSLB an das Bayerisches Staats-
ministerium für Unterricht und Kultus, den 4. Mai 1934, in: BayHStA MK42607.

(14) Schulärztlicher Bericht, den 20. September 1933, in: BayHStA MK42607.

(15) 田村栄子『『教育の限界』論争とナチ教員同盟の思想－フォルク概念の転換－』宮田光雄
・柳父圀近編『ナチ・ドイツの政治思想』創文社、2002年、157頁。

(16) Bayerische Schullandheim-Arbeitsgemeinschaft im Reichsbund der deutschen Schullandheime an
das Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und Kultus, den 21. Juni 1933, in: Archiv der
Landeshauptstadt München Schulamt 1306/ I / II.

(17) Grundlegende Verfügung des Reichs- und Preußischen Ministeriums für Wissenschaft, Erziehung
und Volksbildung zur Förderung der Schullandheime, den 4. Oktober 1933, in: BayHStA MK42607.

(18) 拙稿「ヴァイマル時代におけるシュールラントハイムの活動状況について－その多義性
・多様性を中心として－」『国際教育文化研究』（九州大学大学院人間環境学研究院国際
教育文化研究会）Vol.3、2003年、15-26頁。

(19) 注(17)の史料参照。

(20) Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei, Bayerische Ostmark Grenzlandamt an das Baye-
risches Staatsministerium für Unterricht und Kultus, den 8. November 1934, in: BayHStA
MK42607.

(21) Nationalsozialistischer Lehrerbund an das Bayerisches Staatsministeriums für Unterricht und Kultus,
den 12. Februar 1935, in: BayHStA MK42607.

(22) *ibid.*

(23) 注(1)の拙稿参照。

(24) Satzung des Schullandheimevereins Regensburg, den 10. November 1938, in: BayHStA MK42607.

(25) Schullandheimverein Regensburg e.V. an das Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und
Kultus, den 29. April 1939, in: BayHStA MK42607.

(26) *ibid.*

(27) *ibid.*

(28) Vgl. Scheibe, Wolfgang: *Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932*, Weinheim/Berlin/Basel, 1969; Röhrs, Hermann: *Die Reformpädagogik. Ursprung und Verlauf in Europa*, Hannover/Berlin/Darmstadt/Dortmund 1980.

(29) Vgl. Kunert, Hubertus: *Deutsche Reformpädagogik und Faschismus*, Hannover/Darmstadt/Dortmund/Berlin 1973.

(30) Vgl. Feidel-Mertz, Hildegard: *Schulen im Exil. Die verdrängte Pädagogik nach 1933*, Reinbeck 1983.

The Process of Conversion of *Schullandheim* in Era between Great War in Bavaria

Tomohiro EGASHIRA

Activity of *Schullandheim* in Germany is the educational activity, which pupils and students in the big city go to rural districts and study in the rich nature and community life. Activity of *Schullandheim* was started after World War I and it was one domain of new education (*Reformpädagogik*) in Weimar era. In this paper I took up the difference of scale and purpose of *Schullandheim* between Weimar era and Nazi era.

In 1926, *Reichsbund der deutschen Schullandheime*, which took the initiative in managing *Schullandheime* in Weimar era, was established. But the scale of activity of *Schullandheim* in Bavaria was the smallest compared with other state. A teacher *Adolf Salffner* indicated the lack of close relationship between parents and school as this reason. In 1929 for the first time in Bavaria genuine *Schullandheim* was established in *Weißenburg*, at the end of Weimar era at last in Bavaria activity of *Schullandheim* started.

In Nazi era activity of *Schullandheim* was strictly organized, so *Reichsbund der deutschen Schullandheime* was incorporated into Nazi teacher's union (*Nationalsozialistischer Lehrerbund*).

And the scale of activity of *Schullandheim* in Bavaria was greater.

In order to administrate the activity of *Schullandheim* Nazi teacher's union needed a grand from health insurance (*Krankenkasse* and *Ortskrankenkasse*). Therefore Nazi teacher's union demanded the mediation to the Department of the Treasury and the Department of the Interior from the Ministry of Education. And Nazi teacher's union stressed the health effect of stay in *Schullandheim*.

In order to examine the characteristic of purpose of activity of *Schullandheim* in Nazi era in Bavaria, I took up *Bayerische Ostmark*, which is the eastern part of Bavaria. *Bayerische Ostmark* is a border region and bordered by Czech Republic. Therefore the region was an important part for Nazis. In Nazi era many *Schullandheime* were established in *Bayerische Ostmark*, and as the purpose the cultivation of consciousness of border and race was stressed.

The activity of *Schullandheim* was not abolished in Nazi era and continued in country, especially in Bavaria the activity of *Schullandheim* in Nazi era was far greater than that in Weimar era. But its educational purpose was changed greatly in Nazi era. Therefore the example of *Schullandheim* needs the new style of description of the new education in Germany.